
【 異世界トリップ（仮題） 】 ポーイズラブ

行之泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【異世界トリップ（仮題）】 ボーイズラブ

【著者名】

行之泉

N5897Y

【あらすじ】

四回で終る予定の短編集になる予定です。
異世界トリップを扱ったボーイズラブ作品です。
軽く読める短編小説を目指します。

晴天に恵まれた秋の日。

雲ひとつない爽やかな朝だった。

住宅街の辺り一面に甘い芳香が漂っていた。

金木犀の香りだ。

僕、屋久ツカネ（おくひさつかね）は、大きなため息をついた。

大好きな香りなのにも関わらず、今日ばかりはこの香りを嗅ぎたくないかった。

一日酔いで頭がガンガンする。

：昨日は飲みすぎた。

ちょっととした振動にも響く頭を抱え後悔しながら、大学への向かっていた。

こんな時に一限目から授業だ。

大学のサークルの単なる飲み会だった。

最初は明るくみんなと合わせて飲んだ。

だけど、途中から止まらなくなつた。

飲み会の前に嫌なことがあつたのだ。

忘れようとして殊更はしゃいだのが悪かつたのか、考えないようになればするほど、あの時にことが思い出された。

昨日、付き合っていた恋人に振られた。

「俺はお前の王子様じゃない」

苦しそうな顔で彼から別れを告げられた。

突然の出来事だった。

鳶色の瞳が魅力的な一学年上の男性だった。

交際は順調に進んでいたはずだった。

第一印象で好きになつたのは確かだ。

いわゆる一目惚れ。

そこに過去に出会つた人の面影を重ねていたのも事実。

でも僕自身は忘れようとしていた。

僕が王子様と呼ぶあの人のこと…

…でも。

…やっぱり忘れられてなかつたんだ。

過去に忘れられない人がいることは話していた。

それが王子様だということも。

曖昧な説明をしたから、元恋人は単なる比喩だと思つて言つたのだろう。

けど、むかし僕が王子様に出会つたのは事実だ。

まだ中学生の頃。

お互いひと目で恋に落ちた。

僅かの間、幸福な時間を過ごした。

だけど、大きな問題を前に別れてしまつた。

もう逢えないし、あれは幻影を見ていたようなものだと理解しているけれど。

沈痛な面持ちで地面を見る。

本当はこのまま学校に行かなきやならないけれど、回れ右をして家に帰りたくなる。

独り暮らしのアパートへと。

その時、僕の周囲が暗くなつた。

さつきまで雲ひとつ無かつたのに、突然現れたのだろうか。

不思議に思い顔を上げる。

夢を見ているのかと思った。

広い空の上を銀色の翼をつけた馬が走つてゐる。

馬の上には若い男性が乗つていた。

僕の記憶の中にだけ存在してゐる人。

…僕の王子様。

彼を凝視していると視線に気がついたのか、馬はツカネの方へ駆けてきた。

「何を見ているのだ。愛しい我が君」

記憶の中にしか存在しなかつた彼が僕に笑いかけた。

「約束しただろ？。迎えに来ると」

約束 その1（後書き）

今回は最初から四回連載のつもりで。
試行錯誤中。

「……ディムナ」

僕は呆然として彼の名前を呼んだ。

「どうした。そんな驚いた顔をして」

不思議そうな顔をしてディムナは首を傾げた。

黄金の髪が艶やかに輝き、まるで天使が光りの輪を戴いているようだ。

白い肌は透き通っていて、まず日本人ではないと判る。鼻筋の通つた端整な顔。

懐かしさで涙が出てきそうだ。

彼を見ると、別れた元彼がいかに似ていなかつたのか判る。横顔にその片鱗が見えるだけだ。彼とはまったく違う。

鳶色の瞳は別れ際の彼の瞳の色。

この世界を動けるよう、己の存在をこの世界に馴染ませるために術の余波で変化したものだ。

その瞳が本来は灰色がかつた紫色をしているのを僕は知っている。元の姿ではない証。

眩しい笑顔を見ていると、押さえていた思いが溢れそうになる。抱きつきたい衝動を抑えた。

どうして彼がこの場にいるのか、それを正さなければならぬ。彼と僕は生きている世界が違う。

現実社会では起こりえない、翼の生えた馬が飛んでいるという事を見ても判る。

「迎えに来た?僕に会いに来ただけではないのですか」

「ふと。過去の思い出が蘇つてくる。

出会いは偶然だつた。

夏休み、道端で迷子になつた小さな子供を拾つた。泣き止まない子供を自宅に連れ帰り一緒に遊んだ。夜に兄と称するデイムナが現れた。

彼をひとめ見た時、僕は恋に落ちた。

彼等は妖精で女王と人間の混血だと紹介された。

父の生まれた世界を見学に来て、弟が逸れ迷子になつたらしい。僕が心の中で「僕の王子様」と呼んでいるのは、そのせいだ。妖精の世界では女王の息子である王子は沢山いるのだが、僕にとっての王子様はデイムナだけだ。

彼は迷子の弟を保護してくれたお礼を僕に言つた。

その後、弟が僕に懐いているのを見て、一週間面倒を見てくれないかと提案したのだった。

夏休みだつたし、何より一日惚れした彼と離れたくなかった。彼の提案に乗つて僕は妖精の世界へ行き、夢のような一週間を過ごしたのちに帰ってきた。

帰宅して僕を待つていたのは、やつれ果てた祖母の姿だつた。両親を幼い頃に亡くし祖母と一緒に暮らしだつた僕は、祖母に旅行をすると言つて家を出でいた。

一週間くらいと言つて家を出た僕が帰宅したのは一年後。妖精の世界での一週間は、現実の世界では一年だつたのだ。

祖母は何も聞かず、帰宅した僕を喜んでくれた。

だけど、それ以降は祖母が病で亡くなるまで、僕は旅行を禁じられた。

中学を一年行かなかつた僕は、もう一度同じ学年を通うことになつたのだけど、修学旅行ですら欠席させられた。

今でも僕は、祖母には悪いことをしたと思っている。

あの祖母の姿を見て、僕は未練たっぷりだつた恋に終止符を打つ

た。そして今がある。

「ツカネは言つたではないか。別れたくない。私もそう思った。
だからまた会おうと約束しただろ?」

「あれは…違います。このまま別れるのは寂しいと言つただけで…
ディムナは、僕に会いにもう一度この世界に来ると約束してくれた
だけで…」

あの時の約束。忘れるはずはない。

妖精は約束を違えることが出来ない存在だ。
だから彼が僕に愛の告白をして恋人として過ぎしても、終りは見
えていた。

離れたくなかったけど、離れた。

それが本心だ。

言葉は僕の方が正しい。

だけど心情で言えばディムナの言つた通りだ。

一週間しか居なかつたのに、僕達は沢山話をした。帰りたくなか
つた。

でも僕を育てくれた祖母の事を思うと、帰つてきて良かつたと
思う。

複雑な思いが僕の中で渦巻く。

戸惑うばかりの僕を見て、彼は表情を曇らせた。

「もしかして、嫌だつたのか」

「そんな事はないよ。また逢えて嬉しい」

「ならばもう一度向こう側に来てくれないか。弟が寂しがっている。
ツカネに会いたいと言つて泣くんだ。困った兄を助けてくれないか。
不自由はさせない。もう一度、一週間でいいんだ。弟の子守りをし
てくれないか」

コチラの世界では一年が経過するということだ。
行方不明で一年。

せつから第一志望の大学に入学したといふのに…
心の中、現実と感情の天秤が揺れ動く。

「それは…」

「私の我がままだったようだ…」

ハッキリしない僕を見て、ディムナは失望を顔に浮べた。切ない表情。

僕の胸が軋むように痛んだ。

「待つて！」

胸が苦しくて切なくて、僕は思つまま感じじるままに口を開いた。

「僕。行きます。向こう側に連れて行つて。ディムナ」

約束 その2（後書き）

第一話からずいぶん時間が経ってしまいました。
スミマセン。反省。妖精の世界だと瞬きをする間でしようと
笑)

さて。短編にあまり時間をかけてもしょうがないので、この話は次
回で一区切りつけたいなと思ってます。
こんどは目標の「序破急」展開で行けそう。
最終回は現在鋭意制作中。明日か明後日には更新します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5897y/>

【異世界トリップ（仮題）】ボーアズラブ

2011年11月26日19時55分発行